

小論文 A

〔一八〇点
四五分〕

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子のページは、白紙を除いて、1〜4ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 3 解答は、「令2 解答用紙」に記述しなさい。
- 4 試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

問題

次の文章は、ある哲学者が「哲学的思考」について論じた内容（全17講）のうち、信念の対立をどう乗り越えるかについて論じた「第10講」の一部です。これを読んで、後の問い（問1、問2）に答えなさい。

学校や仕事、家庭など、僕たちは日常生活のさまざまな場面で、日々信念の対立に遭遇する。「俺の考えは絶対に正しい、お前は絶対にまちがっている!」……そんなことを、僕たちはしばしば口にしてしまうことがある。

でも、これまでずっと述べてきたように、この世に絶対に正しい信念なんてものはない。そう、僕たちの信念は、実は何らかの欲望や関心によって編み上げられたものなのだ。

たとえば、学校は子どもたちをびしっと統率しなければならぬと考える親や教師がいる。その一方で、学校は子どもたち一人ひとりの自由や自主性をできるだけ尊重しなければならぬと考える人たちがいる。

異なる信念を持つ両者は、時に激しく対立することがある。

でも、この信念の次元で対立をつづけているかぎり、両者が理解し合うことはひどくむずかしい。「自分こそが正しい、お前はまちがっている」。そんな信念のぶつけ合いに、多くの場合終始することになるだろう。

そんな時に重要なのは、どちらの信念が絶対に正しいかと考えるのをまずやめることだ。そしてお互いの信念が、いったいどのような欲望や関心から編み上げられたのか、互いに吟味することだ。

たとえば、集団統率をよしとする教師は、かつて学級崩壊に苦しんで、そんな経験はもう二度とごめんだと思っているのかもしれない。だから統率力を発揮して、子どもたちをまとめ上げ、校長や保護者たちからその指導力を認められたいという欲望を持っているのかもしれない。

他方、子どもたちの自由や自主性を尊重すべしと考える人は、子どもの頃集団統率的なクラスになじめず、孤独な思いを抱えた

経験があるのかもしれない。だからそんな疎外感を、今の子どもたちに味わせたくないという欲望があるのかもしれない。

もつとも、本当に学級崩壊の「経験」が集団統率への欲望を抱かせたのか、あるいは、集団統率の苦しい「経験」が自由尊重の欲望を生み出したのか、その真相は究極的には分からない。前講で述べたように、過去の経験と僕たちの欲望との因果関係は、厳密には「たしかめ不可能」なものなのだ。

でも、集団統率の欲望であれ、自由尊重の欲望であれ、僕たちがそうした欲望を抱いているのだとするならば、その欲望自体を疑うことはできない。

ここで重要なのは、**僕たちの信念は実は欲望の別名だ**ということだ。

信念対立の現場において、僕たちはそのことを十分に理解し合う必要がある。そうすれば、「なるほどね、あなたがそういう欲望を持っているということについては、まあ分からなくもないよ」と、お互いに一定の理解を示し合えるようになるだろう。

信念の次元で議論をし合うかぎり、僕たちは互いに一步も引けなくなることがある。でも欲望の次元で対話をすれば、僕らは相手の欲望を理解しようとすることができるようになる。少なくとも、その可能性を開くことができるようになる。

もちろん、だからといってすぐにお互い共感し合ったり納得し合えたりするわけじゃないだろう。でもその理解への意志は、対立を乗り越えるためのささやかな一歩になるはずなのだ。

そこで次に重要なのは、お互いのそうした欲望や関心が、本当に妥当かどうか吟味することだ。

「自分の統率力を認めさせたい」という欲望は、本当に子どもたちのためになっているといえるのか？「孤独を感じさせたくない」という思いは、本当は独りよがりな欲望にすぎないんじゃないか？ といった具合だ。

そうやってお互いの欲望の妥当性をたしかめ合いながら、僕たちは、徐々にお互いが納得し合える「共通関心」へと思考を向かわせる必要がある。独りよがりな欲望・関心じゃなく、どちらも共有できる、もっと深い欲望・関心を考え合うのだ。

たとえば、自由尊重派の教師のみならず、集団統率派の教師も、子どもたちにはゆくゆくは自由に、つまり生きたいように生きられるようになってほしいという関心なら、きつと共有できるにちがいない。

でもだからといって、子どもたちのわがままな自由を、今教室でそのまま認めるわけにはいかない。そのような関心もまた、両者は共有できるにちがいない。

第1講でいったように、僕たちが自由に生きるためには、他者の自由もまた認めることができなければならないのだ。哲学ではこれを「自由の相互承認」の原理と呼んでいる。

この原理の重要性を、両者はきつと「共通関心」として持つことができるはずだ。

とすれば、^(イ)僕たちは「集団統率か、自由尊重か？」といった対立をつづけるのではなく、子どもたちのゆくゆくは自由と、その「相互承認」を育むという「共通関心」を、どうすれば実現することができるのか、共に考えていけるようになる。

信念対立は、その時対立から協同へとひっくり返るのだ。

もちろん、実際の信念対立の現場では、とりわけ感情が邪魔をして、事はそう簡単には進まないだろう。でも、もし僕たちが本気で対立を乗り越えたいと思うなら、こんなふうにお互いの欲望・関心の次元にまでさかのぼり、その上で、お互いが納得できる共通関心と、それを叶えるためのよりよい第三のアイデアを見出し合っていくべきなのだ。

(『苦野一徳』はじめての哲学的思考』ちくまプリマー新書、二〇一七年、一〇三〜一〇八頁、による。なお、本文中の小見出しは省略した。)

問1 傍線部（ア） 「信念のぶつけ合いに、多くの場合終始することになるだろう」について、筆者は「信念のぶつけ合い」に終始しないためにはどうすべきだと考えているのか、一一〇字以内で説明しなさい。

問2 傍線部（イ） 「僕たちは『集団統率か、自由尊重か？』といった対立をつづけるのではなく、子どもたちのゆくゆくの自由と、その『相互承認』を育むという『共通関心』を、どうすれば実現することができるのか、共に考えていけるようになる」における、「集団統率か、自由尊重か？」という信念のぶつけ合いについての「共通関心」とは何か、そして、あなたが考える、その「共通関心」を実現するための「よりよい第三のアイデア」を二六〇字以内で述べなさい。